世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

『カラマーゾフの兄弟』の続篇／小説によるドストエフスキー論　その4

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-10-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三田, 誠広 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/900

『カラマーゾフの兄弟』の続篇／小説によるドストエフスキー論　その4

三田　誠広

1

ドストエフスキーの絶筆となった『カラマーゾフの兄弟』は、より大きな物語（創作ノートには『偉大な罪人の生涯』というタイトルが記されている）の前篇だとされている。そのことは作品に付けられた前書きの中で作者自身が語っている。

その部分を中山省三郎訳で引用しておく。

困ったことには、伝記は一つなのに、小説は二つになっている。しかも、重要な小説は第二部になっている――これはわが主人公のすでに現代における活動である。すなわち、現に移りつつある現在の今の活動なのである。第一の小説は今を去る十三年の前にあったことで、これはほとんど小説などというものではなくて、単にわが主人公の青年時代の初期の一刹那のことにすぎない。

確かにこの前書きで明確に主人公だと指摘されたカラマーゾフの兄弟の三男アリョーシャは、「第一の小説」ではほとんど活躍の場が与えられていない。長男のドミトリーが父親に殺意を抱き、次男のイワンが異母弟の下男スメルジャコフを嗾（そそのか）し、スメルジャコフが実際に手を下した、父親フョードル・カラマーゾフの殺人事件に関して、末弟アリョーシャは一貫して傍観者の立場にいる。これではとても主人公とはいえない。

作者自身が続篇の存在をほのめかしていることから、注意して「第一の小説」を読むと、次に書かれるべき作品の伏線ではないかと思われる記述がいくつかある。主人公であるはずのアリョーシャは、傍観者ではあるのだが、主要な登場人物と対面し、彼等の主張に耳を傾ける場面が丹念に書き込まれている。

アリョーシャは修道士なので、宗教的なことを口にすることはあるが、相手に対して自分の意見を述べるわけではなく、反論もしない。その対話がアリョーシャにどういう影響をもたらしたかについても、「第一の小説」は何も語っていないのだが、これは明らかに、次の作品の存在を予感させる。このままで終わってしまっては、なぜ三男アリョーシャという人物が設定されたかも不分明となるような状態で、「第一の小説」は唐突に終わってしまっているのだ。

おそらくは、「第一の小説」では修道士として、きれいごとばかり話しているアリョーシャが、後篇では、「偉大なる罪人」としての全貌を現すことになるのだろう。つまり「第一の小説」はアリョーシャに関しては、嵐の前の静けさのような、静謐ではあるが将来に不穏なものを感じさせる設定になっているのだ。

この修道士の青年アリョーシャには、その純粋な人柄に惹かれた取り巻きの少年たちがいる。病気で死んだイリューシャという少年の他には、印象に残る人物は少なく、ただ十人ほどの少年たちがいつもアリョーシャのそばにいるという設定になっている。作者自身の言葉にあるように、「第一の小説」が「十三年前にあったこと」（この十三という数字も象徴的な意味をもっているのだろう）だとすれば、続篇が描く十三年後（それはドストエフスキーが小説を書いている「いま」だと考えられる）には、彼らは二十代の青年になっているはずだ。

話を先取りして言えば、『カラマーゾフの兄弟』の単行本が出版された一八八〇年の翌年にドストエフスキーは亡くなるのだが、その同じ年（作者の死のわずか一ヵ月後）に、皇帝アレクサンドル二世は爆弾テロによって暗殺される。アリョーシャの取り巻きの少年たちは、皇帝暗殺に関わった若者たちと同世代なのだ。

この少年たちの中で唯一強い個性の輝きを放っている

のは、コーリャという少年だ。強い反抗心をもち、知恵遅れの青年を嗾してガチョウの首を切らせるなど、残酷な行為を平気でやってのけ、線路の間に横たわって汽車を通過させるという武勇伝をもつこの少年が、玩具の大砲に用いる火薬の調合ができるという設定になっている。玩具にまつわる少年らしい話とも受け止められるこの記述は、明らかに後篇への重要な伏線だろう。この少年が十三年後には、爆弾テロの集団に関わることを、作者のドストエフスキーはこの時点で考えていたはずなのだ。

ドストエフスキーは『罪と罰』においてナポレオン崇拝者の殺人犯を描き、『悪霊』ではリンチ殺人事件を起こした反体制運動の首謀者ネチャーエフをモデルとした人物を登場させた。ドストエフスキーは自らもペトラシェフスキー事件という無政府主義の文献を読む学生グループに参加して逮捕された経験をもっている。その後も学生運動には興味をもっていたようで、ロシアの無政府主義者バクーニンが、マルクスとともにジュネーブで開いた第二回インターナショナル大会の時期に、ジュネーブに滞在して、ロシアの文化人や学生たちと交流している。またドストエフスキーが反体制運動で逮捕された学生の裁判を傍聴したという話も伝わっている。さらに、ドストエフスキーが住んでいた集合住宅の隣室の住人が、地下組織の学生だったことも判明している。おそらくドストエフスキーは、そうした学生たちとも密かにつきあい、取材をしていたのではないかと思われる。

奇しくも文豪が亡くなった一ヵ月後の一八八一年三月に、皇帝アレクサンドル二世暗殺という大事件が勃発した。だが作者の生存中に、暗殺未遂事件は頻繁に起こっていたのだ。もしかしたら作者の胸中に、あの天使のようなアリョーシャが「偉大な罪人」（この言葉そのものはイエス・キリストに重ねられている）となって、皇帝暗殺に関わるといった構想が秘められていたのかもしれない。

もっとも、たとえそのようなプランを作者が抱いていたのだとしても、実現は不可能だったろう。帝政ロシアでは言論表現の自由が保証されていなかった。ドストエフスキー自身、若き日に逮捕され、ただ読書会に参加したという事実だけで死刑判決を受けている。実際には死刑が執行される練兵場に連れ出されたところで減刑とな

り、シベリアでの四年の懲役刑と、その後の六年近くに及ぶ辺境地帯での軍務という罰を受けた体験からして、ドストエフスキーはきわめて用心深い作家となっていた。

たとえ小説というフィクションの中であっても、皇帝暗殺を目指すテロ集団を描くなどということは、実現できなかっただろう。作者が原稿を書いたとしても、出版は難しかったと思われる。残念ながら、「第一の小説」が出版された直後に作者は亡くなってしまい、続篇についてはそのタイトルだけが知られているだけで、創作ノートさえ残されることはなかった。

2

この紀要にもすでに書いたことだが、いまから五〇年前の一九六七年の三月、わたし（三田）は『文藝』の編集者に連れられて、『死霊』の作者でドストエフスキーの研究家としても知られる埴谷雄高を吉祥寺の自宅に訪ねた。怖れを知らぬ高校生だったわたしは、不躾にも埴谷の未完の大作『死霊』の話が出たおりに、自分は『死霊』の続篇を書くつもりだといったことを述べた。埴谷はいまのわたしより若かったはずだが、高齢者らしい優しさとともに、『死霊』は自分が完成させると述べ、おそらくは落胆したようすを見せたであろうわたしに向かって、きみは若いからドストエフスキーの続篇を書きなさい、と付け加えたのだった。

それから一時間ほども、ドストエフスキーの話をしただろうか。何しろ五〇年前のことだから、遠い記憶となっている。今年はロシア革命の百周年にあたっている。ということは、わたしと埴谷が話していたのはロシア革命の五〇年後だったのだなと、いまにして思う。ドストエフスキーは一ヵ月後に起こる皇帝暗殺のことも知らずに亡くなった。ロシアで革命が起こるなどということは、夢にも思っていなかったのではないだろうか。

その夢が実現したことを、後世のわたしたちは知っている。皇帝暗殺が、その革命に到るささやかな一歩であったこと、実際の革命では、暗殺されたアレクサンドル二世の孫にあたる皇帝ニコライ二世とその家族は、二月革命の後に幽閉され、十月革命のあとに処刑された。それが単なる暴動であったのか、正義の革命であったの

かは、何ともいえないところだが、少なくともわたしが埴谷を訪ねた五〇年前の時点では、ロシア革命はバラ色の夢が実現した実例として受け止められていたのではなかったか。

埴谷は政治評論も手がけ、独裁者として君臨したスターリンを日本で最初に批判した人としても評価されているのだが、その埴谷も、レーニンのロシア革命そのものは批判していたわけではなかった。しかしその後、社会主義国ロシアは経済的な行き詰まりに直面し、支配下の東欧諸国や中国などが次々に自由主義経済を受け容れることになり、ロシアそのものもソビエト連邦を解体することになった。それは五〇年前のわたしたちには想定外のことだった。

埴谷雄高はソビエトロシアの崩壊の時点では、まだ生存していて、それを現実として受け容れたはずだが、もともと無政府主義者だった埴谷にとっては、あるいは必然と感じられたのかもしれない。いずれにしても、埴谷雄高は『死霊』を完結して亡くなった。わたしには、埴谷から与えられた課題だけが残った。すなわち『カラマーゾフの兄弟』の続篇だ。

埴谷からこの課題を与えられた時、高校生だったわたしは、途方もない課題だと感じた。そのようなことは実現不可能だろうとも考えていた。正直のところ、『死霊』の続篇を書くことは、それほど難しくないと高校生のわたしは考えていた。埴谷は三章までを収めた単行本を出した後、長く『死霊』の執筆を中断していた。しかし旺盛な筆力で政治評論やエッセーを書き、その中で、『死霊』の構想ともつながるような論理を提出していた。埴谷の政治評論やエッセーは『死霊』の創作ノートのようなものだとわたしには感じられた。『死霊』の山場に釈迦と大雄の対決があるということも、すでに埴谷はエッセーで書いていた。

大雄というのはジャイナ教の教祖ニガンタ・ナータプッタのことで、修行時代の釈迦にとっては、ライバルのような思想家だった。仏教やインド思想についてそれなりに勉強していたわたしにとっては、この山場の場面を書くこともさほど難しくはないと感じられていた。何よりも『死霊』は日本の話だ。『カラマーゾフの兄弟』

はロシアを舞台としている。わたしはツルゲーネフからアルツィバーシェフまで、ロシア文学は読み込んできたが、ロシア人ではないし、ロシアの歴史についても詳しくはない。何よりも、ロシア語が読めなかった。『カラマーゾフの兄弟』の続篇を書くためには、準備が不足していた。

いまから五〇年前の三月というのは、わたしの同級生たちが大学に入学した時期だった。わたしは高校の途中で一年間休学したために、あと一年、高校生を続けなければならなかった。その同じ年の十月、羽田空港近くの学生デモの中で一名の死者が出た。わたしの同級生だった山﨑博昭くんで、京都大学一回生だった。当時は大きな話題となり、山﨑くんのノートが週刊誌に掲載されたりした。その中に「ドストエフスキーのような小説を書きたい」といった文言があったと記憶する。そのことをわたしは重く受け止めたはずだった。

一年後、わたしは早稲田大学だけを受験した。早稲田には露文科があったからだ。しかしいざ合格して第二外国語の志望届を出す時、わたしはフランス語を選択してしまった。高校を休学していた一年間、わたしはフランス語を独学し、サン＝テグジュペリの『星の王子さま』を原文で読んでいた。その体験が活きて、のちにわたしの唯一の訳書が講談社の「青い鳥文庫」に収録されることになるのだが、独学による知識があったから、わたしは大学ではまったく勉強せずにフランス語の単位をとることができた。

いまにして思えば無念なことだった。せっかく早稲田に入ったのだから、ちゃんと勉強しておくべきだった。せめてキリル文字がすらすら読めるようになっていればあとで苦労することもなかったし、早稲田の先生からロシアの歴史や文化について教えを受けておくべきであった。後悔しても遅いので、わたしはロシアに関する資料を集め始めた。何よりも、翻訳でもいいから、ドストエフスキーを読み返さないといけない。

わたしは基礎から勉強し直すつもりで、まず『罪と罰』を読み返すところから始めた。この連載でも指摘したように、この作品では脇役として登場する、冷徹なニヒリストの風貌をもったヤクザ者のスヴィドリガイロフ

という人物のキャラクターは、次の『白痴』の初期ノートに現れる白痴と呼ばれる主人公（わたしはこの初期プランを「書かれざる白痴」と呼んでいる）、さらに『悪霊』の主人公と、ひとつのキャラクターが作品ごとにくりかえし登場して、その造形が深められていく。

すぐに想像できるのは、『カラマーゾフの兄弟』の続篇の主人公（アリョーシャ）もまた、スヴィドリガイロフの系譜を継ぐ人物ではないかということだ。そのことを確認するために、スヴィドリガイロフという人物の特性を改めて検証しながら、この人物を主役にして原典を書き改めるという着想が生じ、『新釈罪と罰』という作品に結実した。そうした過程はすでにこの連載で詳述した。『新釈白痴』、『新釈悪霊』と、わたしのドストエフスキー研究はさらに進んでいった。そしていよいよ、『カラマーゾフの兄弟』の続篇を書くという段階に進んだ。

ドストエフスキー自身が述べているように、後篇の主人公はアリョーシャでなければならない。だが、一人称や三人称主観描写で主人公の内面を描くことはできない。前篇で聖なる修道士として天使のような風貌をもっている主人公が、いきなり邪悪な内面を露呈するなどといったことがあっては、作品は冒頭から破綻することになる。この主人公は最後まで謎めいた存在であるべきだ。そうなるとアリョーシャを外側から眺める視点となる人物が必要だ。見かけ上の主人公、あるいは語り手としてつねに主人公のかたわらにあって物語を推進していく人物を設定しなければならない。

これはすぐに決まった。原典（前篇）でも魅力的なエピソードをまとった多感な少年として描かれているコーリャが、後篇の見かけの主人公の位置に据えられることになる。コーリャが玩具の大砲に用いる爆薬を作るエピソードが原典にあるところから、この人物は皇帝暗殺を企てるテロ集団の一員であり、爆弾製造の責任者といった立場にあることは、すぐに見てとれることだ。

では本来の主人公であるはずのアリョーシャは、どのような立ち位置にいるのだろう。原典の最後においては、父殺しの犯人である下男のスメルジャコフが自殺し、その罪を甘んじて受け容れた長男ドミトリーがシベリアに送られ、さらにスメルジャコフを嗾した責任感に

さいなまれた次男イワンが黙狂となるといった話が綴られている。前篇はそこで終わっている。

3

そのあとにどのような話が続いていくのかということについては、容易に想像がつくのではないか。父親が亡くなり、異母兄のスメルジャコフを入れれば四人となる兄弟の内、一人は死に、一人はシベリア送り、さらに一人は黙狂となった。ただ一人、アリョーシャだけが健常者として故郷に残される。

当然のことだが、父親の遺産となった資産や領地の整理が、残されたアリョーシャの責務となるはずだ。友人のラキーチンというやや怪しげな実務家がそばにいることから多少の手助けはしてくれるだろうが、雑務を担うのはアリョーシャでなければならない。すでにアリョーシャは前篇で修道院を出ている。この人物は前篇ではいくぶん知恵遅れにも見えるほどのピュアな人物とされているのだが、それは見せかけにすぎない。実務をやらせればてきぱきとこなすだけの能力のある人物と考えられる。

原典には魅力的な女性たちが登場する。娼婦的な魅力のあるグリューシェニカ、聡明で頑なな令嬢カテリーナ、子どもっぽさの中にわがままな欲情を感じさせるリーザ。これらの女性は必ず後篇にも登場して、激しいドラマを演じることになるだろう。ドストエフスキー自身によって「十三年後」と指定されているその時点では、シベリアに送られたドミトリーが保釈となって帰還する可能性があるのではないか。

イワンはずっと黙狂のままなのか。黙狂を装っているだけではないのか。この二人は主人公アリョーシャの血の通った兄弟なのだから、やがて物語の表舞台に登場することになるはずだ。これら原典の登場人物については、作者によってキャラクターがきっちりと設定されている。むろん十三年という年月が経過しているのだから、少しは変貌を遂げているだろうが、人物の本質まで変わってしまうわけではない。

そこで考えなければならないのは、後篇だけに登場する人物たちだ。これは後篇の作者（三田）によって造形されるオリジナルなキャラクターだということになる。

すでに述べたように、原典に登場した少年たちは、必ず登場させなければならない。その人数が「十人ほど」と書かれていることから、多くの研究者は、アリョーシャと少年たちを、イエスと十二使徒になぞらえている。十二人の使徒にキリストを含めれば十三人になる。その晩餐の場面は多くの宗教画に描かれている。ドストエフスキーならばそういうイメージを思いうかべることも充分に考えられる。わたしもそのことは検討した。

しかしアリョーシャの周囲にいるのが若者たちばかりでは、物語の奥行きが不足するように感じられた。それぞれに個性をもち、人生経験も重ねた魅力的な人物たちが、アリョーシャの脇を固めるべきではないのか。十二使徒というアイデアを活かしながら、まったく新たな視点から、アリョーシャの周囲にいるべき人物像を一人一人、造形していかなければならない。前篇にも名前のあるコーリャと、もう一人、カルタショフという少年の二人だけを、重要人物として描き、残りの名も無い少年たちは、最後の方でまとまって登場させることとして、他の人物たちを設定していくことにした。

アリョーシャは修道士だったが、仕えていたゾシマ長老が亡くなり、修道院を出ることになった。原典はそこで終わっている。その後、アリョーシャは父が残した領地の整理などの雑事に対応しなければならない。十数人の少年たちはやがてばらばらになってしまう。そこから何が起こるのか。その先は原典からは引き出せない。新たな作者（三田）の想像力でまったく新たな物語を紡がなければならない。

そこに到ると、書き手である三田のモチベーションというものが重要になってくる。三田はただ埴谷雄高に提案されたからそれに従ったというわけではない。自分の作家としてのモチベーションの延長上に、今回の試みがあるということだ。小説というものの普遍的なテーマとして、「いかに生きるべきか」という問題がある。三田の生きた時代はとくに、同時代の多くの若者たちが生き方を模索し、試行錯誤を重ねることが多かった。

それは政治と宗教に絡んだ大問題と、自分の生き方を結びつける、壮絶な戦いであったはずだ。その意味では、三田が生きた二十世紀後半の日本と、ドストエフス

キーの晩年の十九世紀後半のロシアとは、かなりの部分で（たとえば学生運動が盛んでテロリズムが横行したという点で）重なり合うことが多いのではないか。

それでは、「いかに生きるべきか」というテーマについて、アリョーシャはどのように考えていたのだろうか。それは単純なものではない。長篇の主人公となる人物であるから、単純であってはならないということは前提だが、原典においてもアリョーシャは、謎めいた人物として描かれている。修道士として勉学に励んでいたアリョーシャが、師のゾシマ長老の遺骸が腐臭を放つ現実に遭遇して激しく動揺するさまは、原典の一つの山場になっている。理念としての宗教と、腐臭を放つ現実とのはざまで、アリョーシャは立ち止まり、思い悩む。

アリョーシャにはカラマーゾフの血が流れている。長兄ドミトリーの熱血を、弟のアリョーシャはわがことのように感じたはずだ。次兄イワンの冷徹なニヒリズムについても、アリョーシャは疑念を表明しながらも心の内では共感をもっていたのではないか。実際の犯人のスメルジャコフも、血をわけた異母兄だという設定になっている。むろん情欲の人であった父親の血もアリョーシャには受け継がれている。つまりさまざまな要素が入り混じった複雑にして不可解な人物として、この「偉大な罪人」と呼ばれることになる主人公は、読者の前に現れることになるのだ。

その中で三田が書くべき作品のテーマとして当然のごとくうかべあがってくるのは、「政治と宗教」ということになる。それはわたし自身の「いかに生きるべきか」というテーマと関わっている。わたしが生まれた時代というのは、終戦直後の混乱期から、日本がアメリカの属国として経済成長を達成し、国としての体制を整えていく時期だった。二〇世紀末のソビエトロシア社会主義体制の崩壊といった事態は、わたしの学生時代には想定外のことであり、それは当時の作家や多くの文化人にとっても共通の認識だったのではないかと思われる。

多くの人々が社会主義体制を一つの理念として信じていた。一方、目の前には、アメリカ経済と連動して成長していく日本の現実があった。その矛盾点を克服する手段として、テロリズムに走る若者たちがいたことは歴史

的事実だ。よど号ハイジャック事件、連合赤軍あさま山荘事件、三菱重工本社爆破事件などのテロ事件に引き続いて現れたのが、オウム真理教のサリン事件であり、さらには世界的な話題となっているイスラム原理主義の問題などがある。

政治的なテロ事件と、宗教的なテロ事件は、ともに美しい理念を追い求めるがゆえに、現実の問題点を暴力や爆弾や毒ガスによって解決を図るという流れがある。その点では、政治的理念と宗教とは同根の問題と考えることができる。いかに生きるべきかと真剣に悩んだ末に、テロリズムに走る。そこからは必然的に、暴力性を内にはらんだ静かな宗教教団といった構図が見えてくる。前篇（原典）に描かれたアリョーシャの物静かなたたずまいの陰にひそんでいる暴力の気配。怪しい宗教教団の教祖としてのアリョーシャ。これは前篇のアリョーシャの姿からごく自然に導かれるイメージではないだろうか。

4

そういう発想の連鎖から、わたしの目の前に見えてくるものがあった。玩具の大砲に詰める火薬作りに成功したコーリャは、やがてテロリスト集団の一員となり、爆弾製造の責任者になっていく。コーリャには仲間がいる。そこには現実にアレクサンドル二世を爆弾で暗殺した、グリネヴィツキーやルイサーコフもいるだろう。実在した女性革命家のソフィア・ペロスカヤやヴェーラ・フィグネルもいるはずだ。

この最後のヴェーラ・フィグネルについては、『新釈悪霊』の中にも、少女時代のキャラクターとして登場させている。インターナショナルの第二回大会がジュネーヴで開かれた時に、バクーニンにつれられてニコライ・スタヴローキンと会話を交わすシーンをわたしはすでに書いている。『新釈悪霊』にはドストエフスキー自身も登場している。実在の人物を小説の中に登場させて、ドストエフスキーの作中人物と交流させるという手法は、すでに試しているので、今回の作品でも抵抗なく用いることができた。

『カラマーゾフの兄弟』の続篇を書こうとしているわたし（三田）は、ドストエフスキーの知らないことを

知っている。文豪が亡くなったわずか一ヵ月後に、皇帝暗殺が実際に起こるのだ。その犯人、皇帝に爆弾を投げつけたのは、ポーランド人のグリネヴィツキーという若者だったが、そうした歴史的事実をわたしは知っている。この歴史的な人物とアリョーシャが出会って、どんな会話を交わすのか。そこでいったい何が起こるのか。

そのような課題を立てて、わたしは小説を書き始めた。黙狂であった次兄イワンが、いつかは言葉を得て話し始めるのではないか。もしもそうなら、イワンが最初の言葉を発する瞬間が、作品の一つの山場になるだろう。それは作品を書き始める当初から考えていたことだ。

わたし（三田）の続篇は、誰ともわからない人物の一人称の独白から始められる。それが前篇（原典）の登場人物の一人であることが最初に示されるのだが、名は明らかにされない。そしてこの最初の独白者は、やがて客観的な語り手として徐々にその存在を消していく。語り手はコーリャから聞いた話を述べているという設定になっているので、物語はコーリャが中心となり、コーリャの視点で語られる。

語り手の一人称は冒頭部分に出てくるだけなので、読者はその冒頭の一人称を忘れ、コーリャを主人公とした三人称主観小説として読み進むことになる。これがわたしの仕掛けだ。物語の後半に到って、突如として登場人物の一人にすぎなかった黙狂のイワンが言葉を話し始め、同時に物語の語り手としても再登場するのだ。

先にわたしは、アリョーシャをキリストになぞらえ、十二人の人物を配置すると書いたが、その人物名も意図的に、新約聖書の十二使徒の名前を用いることにした。ただしロシアの人物なので、読者は気づかなかったかもしれない。ここに十二人のリストを挙げておく。

ペトロ……ピョートル（コーリャの筆名）
アンデレ……アンドレイ（カルタショフ）
ゼベダイの子ヤコブ……ヤコフ・ゼベダエヴィッチ
ヨハネ……イワン
マタイ……マトヴェイ・アルパヨヴィッチ
ピリポ……フィリプ
バルトロマイ……バルトロメイ
トマス……フォマ

熱心党のシモン……セミョーン
アルパヨの子ヤコブ……ヤコフ・アルパヨヴィッチ
タダイ……タダエフ
イスカリオテのユダ……

新約聖書では裏切り者となるイスカリオテのユダは、作品には登場しないが、原典にも登場するラキーチンがその役割を担っている。次兄イワンはもとより、コーリャとカルタショフも原典の登場人物だが、その他の八人は、後篇のみの登場人物だ。

他に後篇のみの登場人物として、密偵のザミョートフを登場させたが、この人物は『新釈罪と罰』では見かけ上の主人公となり、『新釈白痴』にもほんの少しだけ顔を見せている。『罪と罰』の原典に登場するポルフィーリーという予審判事は、テレビの『刑事コロンボ』シリーズのモデルともなった印象的な人物だが、この続篇ではザミョートフに、ポルフィーリーの口真似をさせている。

もう一人、後篇だけに登場する人物としては、医師のユーリー・オブロモヴィッチがいる。これは原典のイワンの妄想の中に登場する悪魔を思わせる人物として設定されている。従って、イワンの妄想の中にしか存在しない人物なのかもしれないが、あまりこだわらずに、イワンの主治医としてつねにそばに存在させている。この名には「おぼろな幽霊」といった意味がこめられている。

さらにまた後篇だけに登場する人物としては、実在のテロリストたちがいる。このテロリストたちは、作品の最後にはアリョーシャの宗教教団（場所としてはリャザンに設定されている）から離れて、皇帝暗殺の現場であるペテルブルグに向かう。資料を読み込んで、皇帝暗殺の場面は実際に起こった出来事を踏まえてなまなましく展開されることになる。

わたし（三田）は『新釈罪と罰』を書くにあたって、旅行社が企画したツアーに参加してペテルブルグに赴き、自由時間に運河沿いの道を歩き回った。白夜の季節だったので陽はなかなか沈まず、『罪と罰』の原典で描かれた警察署、ラスコーリニコフの下宿、ソーニャとスヴィドリガイロフの部屋のある建物、殺人現場の金貸し老婆の部屋など、ほぼすべての建物を実際に歩いて確認

した。

その時は『罪と罰』のことしか考えていなかったので、皇帝暗殺の現場は確認しなかったのだが、その場所はいまは有名な寺院となっているので、ツアーのコースに含まれていて、そこでもかなりの自由時間があったので、意識しないままにテロリストたちがひそんでいた運河沿いの道を歩いていたのだ。もちろん暗殺の現場には、いまある美しい寺院などはなかったのだが、運河や道のたたずまいはそのまま残っているはずだ。

アリョーシャの宗教教団の所在地をリャザンとしたのは、『罪と罰』の主人公のラスコーリニコフの出身地がそのあたりであり、ドストエフスキーの父の領地も近くにあったからだ。残念ながらわたしはリャザンに行ったことがない。ドストエフスキーの訳者として知られる亀山郁夫さんの旅行記や、ネット上に掲示されている個人旅行者の写真集、あとはグーグルの地図と俯瞰図だけで書くことになった。

『新釈悪霊』の舞台に設定したトゥーラも、リャザンの隣県で、それほど離れていない（鉄道の路線は少し手前で分かれている）。そこにはツルゲーネフの領地もあり、少し先にはトルストイの領地もある。これもグーグルの地図だけで描いたのだが、ドストエフスキーの原典を集中して読めば、風景はおのずと目の前にうかんでくる。

武蔵野大学に客員教授として通うようになってから、やがて九年の年月が流れようとしている。その間、わたしはこの「小説によるドストエフスキー論」と称する四冊のシリーズを書き、その勢いのままに『親鸞』を書いた。ドストエフスキーが政治とともに重要なテーマとしたキリスト教（ギリシャ語聖書を原典とする正教）は、親鸞の教えと通底しているところがある。わたしがこの大学で教えるのもあと一年となったわけだが、その間、頭の中にはつねに宗教があった。

その最後の成果として、今年は大学の出版会から、『歎異抄』の口語訳を出すことになったのだが、それを書いている時にふと、親鸞の姿にアリョーシャの影があるような気がしたことを、ここに書き添えておく。

（みた　まさひろ　本学教授）